

## 第 223 次調査



Ph.1 第223次調査Ⅱ区全景（西から）

遺跡略号 ART-223  
調査番号 0565

## 例 言

1. 本報告（本書『有田・小田部47』のうち「第223次調査」）は、福岡市教育委員会が、早良区小田部3丁目204番2において平成18(2006)年1月26日から同年3月10日まで発掘調査(本調査)を実施した、個人専用住宅建設に伴う有田遺跡群遺跡第223次調査の報告書である。なお、申請者の個人専用住宅建設を原因とする調査であり、発掘調査費用には国庫補助金を適用している。
2. 発掘調査では、廃土処理の都合上調査区を二分している。最初に調査した調査区の西半分をⅠ区とし、土砂を反転して後から調査した東半分をⅡ区とした。遺構の呼称は記号化し、井戸状遺構をS E、土坑をSK、性格不明遺構(堅穴状・土坑状)をSX、堅穴住居をSC、掘立柱建物をSB、溝状遺構をSD、柱穴および性格不明のピットをSPとしている。また遺構番号は、調査時における番号をもとに一部整理し、修正して報告している。
3. 本報告の遺構実測図に用いる標高は、有田地区に福岡市教育委員会埋蔵文化財課が設置した測量基準杭上の水準高から移動している。調査区の座標は任意である。各遺構図の方位北は磁北である。なお、上記の測量基準杭が近隣につきしかなく、調査区に国土座標値を移動することが困難であったため、対象敷地周囲を測量して道路台帳地図に入れ込むことにより、地図上の調査区の位置を求めている。
4. 本報告に用いる遺構実測図は、主に久住猛雄(当時、埋蔵文化財課)が作成したが、新海達也(当時、早稲田大学学生)、上野道郎、金子由利子(発掘作業員)の助力を得た。遺物実測図の作成者は以下の通りである。土器・陶磁器は西堂将夫(埋蔵文化財課技能員)、久住猛雄(埋蔵文化財第1課)、および一部を西拓巳(福岡大学大学院)が実測した。片石器は平之内武史(もと別府大学大学院)が、その他の石製品は西拓巳が実測した。拓本採取は西拓巳が行った。遺構図・遺物実測図の製図は、宇野美嘉、成清直子(以上、整理作業員)、西拓巳、および久住が行った。
5. 本報告に用いる遺構写真は久住が撮影した。使用した写真是、35mmカメラおよび6×7判カメラを用いた白黒フィルム撮影である。本報告では用いていないが、カラーリバーサルフィルムによる遺構写真撮影も行っている。
6. 本報告の編集・執筆は久住が行った。
7. 本調査に関わる出土遺物と記録類は、全て福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。

### 調査基本情報

遺跡名	有田遺跡群	調査次数	223次	調査略号	ART-223
調査番号	0565	分布地図図幅名	82. 原	遺跡登録番号	0200309
事前審査番号	17-2-701	調査原因	個人住宅建設	敷地面積	197.44m <sup>2</sup>
調査期間	平成18年(2006年)1月26日～同年3月10日			申請工事面積	197.44m <sup>2</sup>
調査地	福岡市早良区小田部3丁目204番2			調査面積	107.14m <sup>2</sup>

## 1. 調査に至る経緯

平成17年10月17日付けで、松本秀幸氏より福岡市早良区小田部3丁目204番2地内における個人専用住宅の建設工事について、文化財保護法に基づく工事の事前届出が福岡市埋蔵文化財課に提出された（事前審査番号17-2-701）。申請地周辺は有田遺跡群として周知されている埋蔵文化財包蔵地であり、また申請地は以前に同じ敷地についての工事申請があり（事前審査番号3-2-169）、この時の確認調査（試掘調査）によりGL-50cm以下に遺物包含層と遺構が存在することが判明していた土地であった。以前の工事については、基礎掘削などの工事の影響が遺構面に及ばないものと判断され慎重工事として対応していたが、今回新たに申請された工事計画は基礎工事が遺構に影響が及ぶものと判断されたため、関係者との間で設計変更の可能性などを含めた協議を行った。その結果、埋蔵文化財への工事の影響は避けられないということになり、記録保存のための発掘調査を実施するということで関係者との間で合意を得た。その後、条件整備などを整えた上で、平成18年1月26日から現地における発掘調査を行うことになった。

発掘調査（本調査）は平成18年1月26日から同年3月10日まで行った。なお整理作業と報告書作成は平成21年度に行っている。

## 2. 調査の組織（平成17年度：本調査年度、平成21年度：整理・報告年度）

**調査委託** 松本秀幸

**調査主体** 福岡市教育委員会 教育長 植木とみ子（平成17年度）、山田裕嗣（平成21年度）

**調査総括** 文化財部埋蔵文化財課 課長 山口譲治、調査第1係長 山崎龍雄（平成17年度）

埋蔵文化財第1課 課長 濱石哲也、調査係長 米倉秀紀（平成21年度）

**事前審査** 埋蔵文化財課事前審査係 松浦一之介（平成17年度）

**調査担当** 久住猛雄（本調査時：埋蔵文化財課調査第1係、整理・報告時：埋蔵文化財第1課調査係）

**庶務担当** 文化財整備課管理係 鈴木由喜（平成17年度）、文化財管理課 山本朋子（平成21年度）



Fig.1 有田遺跡群223次調査地点の位置 (1/25,000)

なお発掘調査においては、寒空の中、発掘作業員の方々のご協力を得た。また本調査中の遺構図作成では、新海達也（当時、早稲田大学学生）、上野道郎、金子由利子（発掘作業員）の助力を得た。また遺物実測図の作成では、西堂将夫（技能員）、平ノ内武史（もと、別府大学大学院）の協力を得た。その他、発掘調査の条件整備などにあたっては、委託者およびセキスイハイム九州福岡支社の工事担当者の方々にご協力いただいた。これら関係各位の方々には、特に記して感謝申し上げたい。

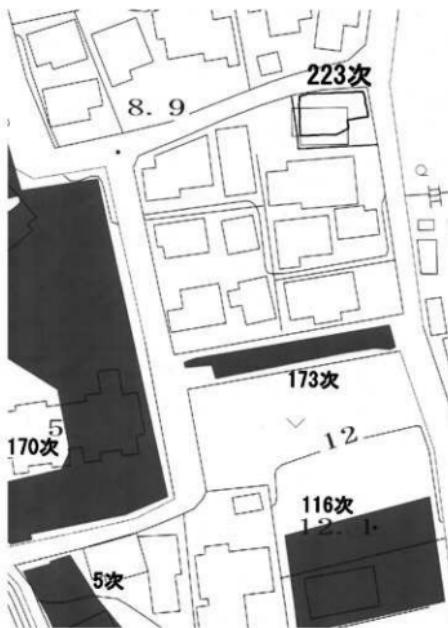


Fig.2 有田223次調査の位置と周辺の調査地点 (1/1,000)

### 3. 調査地点の位置と立地

有田遺跡群は福岡市西南部の早良平野北部にある最大標高15m前後を測る独立中位段丘上に立地している。段丘は南北1km、東西0.7kmの規模である。段丘には、これを深く浸食する谷が周囲に幾つも入り込んでおり、この谷によって段丘は北方向に向かって八つ手状に分岐している。223次地点は段丘中央部から西側に延びる支丘の北側斜面に位置している(Fig.1)。周囲地形は南側と西側がやや高く、谷部が入り込む北側がやや低くなっている。調査地点の現況は旧建物解体後の空地であった。周囲道路路面の標高は、南東側が9.0m前後、北東側が8.45m前後、北西側が8.9m前後である(Fig.3)。周囲では、西側50mで170次(福岡市埋蔵文化財調査報告書第473集)、南側40mで173次(第473集)、南側80mで116次(第308集)の各調査地点がある(Fig.2)。周囲道路の下水道工事に際して123次(J区)調査がなされている(第266集)。

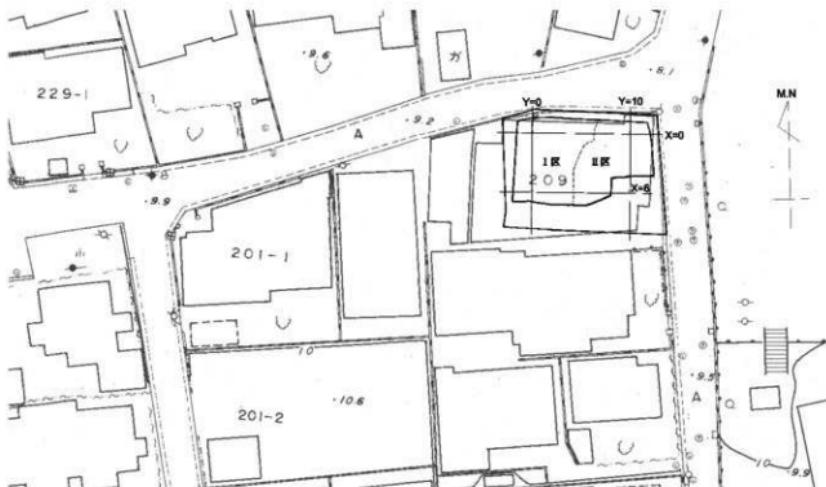


Fig.3 有田223次調査地点と周辺街区 (1/500)

以下、周囲の調査成果について触れておきたい。116次は古墳時代(以下、「時代」を略す場合がある。「縄文」「弥生」「飛鳥」「奈良」も同様)前期と後期の竪穴住居、縄文時代の土坑などが検出されている。縄文後期～晚期の土坑群は、周囲の5次(113次)、123次J区、170次南端などにも分布し、 $38 \times 60m$ の楕円形環状分布をなす。こ



Ph.2 有田223次調査作業風景 (II区：西から)

れら土坑群は「貯蔵穴」として報告されているが、柱痕跡を持つ遺構が多く、柱の存在と貯蔵穴としての機能の関係など貯蔵穴としてはやや説明しがたい部分もある。列状の配置が並ぶ状況は掘立柱建物として復元することも可能であり、環状集落における $1 \times 1 \sim 1 \times 2$ 間の建物(倉庫?)の集積として再考することもできるのではないかだろうか(註1)。170次は、古墳前期・弥生中期の竪穴住居、縄文後晚期・弥生中期・古墳前期の土坑、縄文時代の陥地穴土坑、中世の土坑・方形区画溝、各時代の掘立柱建物が検出されている。古墳前期の竪穴住居は、轆羽口や敲打痕跡のある磨石、砥石、鉄滓、直方体状の鉄素材(?)を含む鉄器5点があり、鍛冶工房の可能性が高い。173次は、縄文時代から中世までのピット群と古代(9世紀)の井戸がある。古代の井戸は下部に方形井戸枠の痕跡があるものである。道路下水道工事に伴う123次のJ区のうち223次周囲では、223次東側道路のJ48区ではGL-70cmで近世溝とピット群が確認される。南側223次前面のJ45区ではGL-1.0~1.3mで八女粘土となり、遺構は無いが(削平か)、東側に谷に入る状況が確認される。223次西側のJ44区ではGL-1.9m以下が黒色土遺物包含層となり、GL-2.2mで鳥栖ロームとなる。170次南側調査区東側道路北半のJ43区は、南側がGL-70cm、北側がGL-1.5mでロームとなり溝やピット群などの濃密な遺構が検出される。この南側に続くJ47区ではGL-40cmでピットが散漫に検出される。170次と5次の間のJ46区では、環状分布の縄文時代土坑群の一部を含む土坑群などが検出される。170次南側調査区の北側道路下のJ42区(J44区の西側)はGL-1.0mでピット群が検出され、この西端から北に延びるJ41区ではGL-1.3mと深くなるが濃密なピット群が検出されている。123次の成果から、223次から170次地点を結ぶライン付近から北側に谷斜面となり北へ深くなつて行く傾向が分かるが(ただし各調査区の遺構検出面自体がそれぞれ削平された結果のレベルである)、深くなる方が遺構の残りがかかるが(良好な場合(170次東側など)もあることがわかる)。これら周囲調査の成果は、223次調査の成果をまとめる上でも参考になるところがある。

(註1)5次報告(113集、1985年)においては、貯蔵穴説とともに掘立柱建物の可能性も検討されたが否定され、現在に至るしかし、おそらく当時は縄文時代における掘立柱建物の類例が少なかったためにその可能性が排除されたのではなかろうか。5次報告では、野多目佔度溝跡1次(第93集)において柱痕跡がありながら建物にはできない貯蔵穴土坑の例を引き、これを普遍化して貯蔵穴とした。しかし掘立柱建物として可能な土坑配置がいくつもある有田例について野多目例から説明できるものかは疑問がある。現在では、縄文時代の掘立柱建物やそれが配置される縄文時代の環状集落も知られており、有田の土坑群についても貯蔵穴が含まれる可能性は排除できないが、掘立柱建物である可能性も再検討すべきであろう。

第223次調查

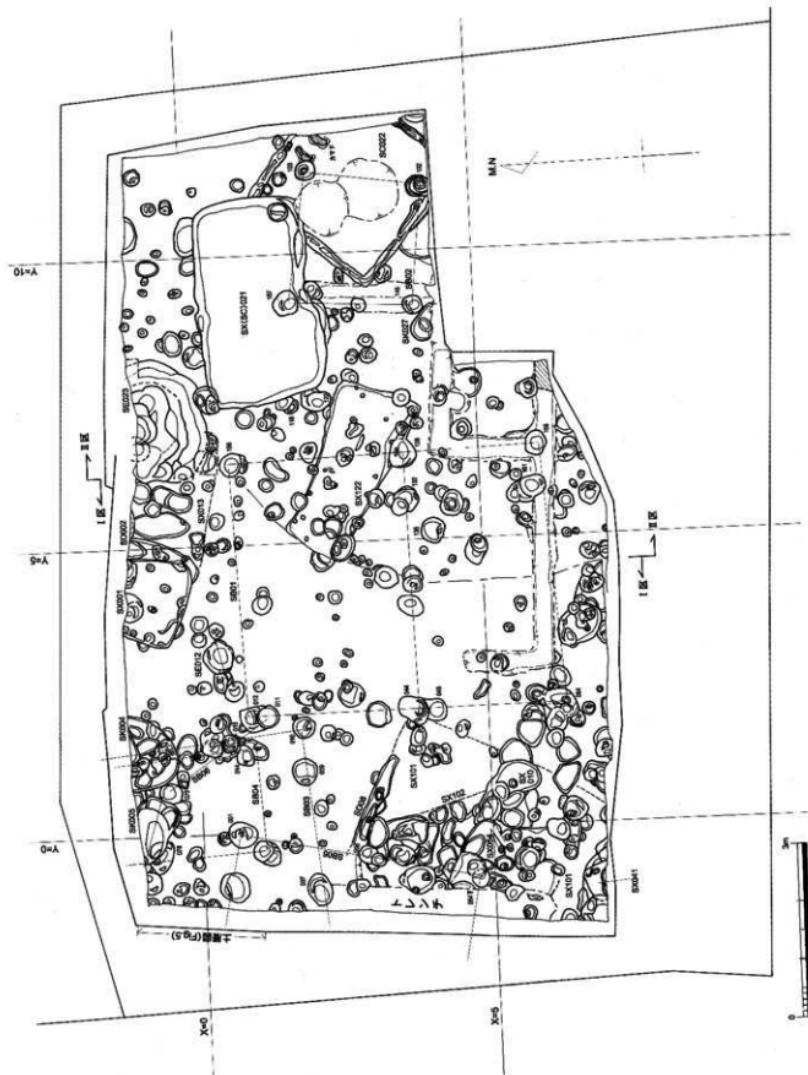


Fig.4 有田223次調査全体図 (1/80)

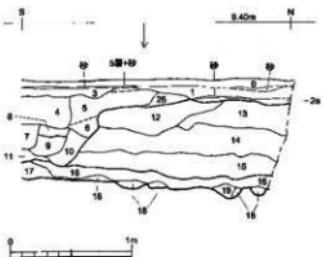


Fig.5 調査区北西壁面土層図 (1/40)

#### 4. 調査の記録

##### (1) 調査の概要

調査範囲は対象地のうち住宅建設により影響が及ぶ範囲である。重機により表土剥ぎを行ったが、廃土置場の確保のため、調査区を東西に分割して調査した。西側をⅠ区、東側をⅡ区とした。遺構検出面は地山である鳥居ローム下層上面である。遺構面の標高は、調査区北西側ではGL-90cm前後の標高8.0~8.1m、南西側ではGL-65cm前後の標高8.4m前後となり、地表からやや深くなるが、調査区南側中央ではGL-25cm前後の標高8.6m、南東側ではGL-15cmの標高8.5~8.6m、北東側ではGL-25cmの標高8.2~8.3mとなり、南側ないし東側に向かって浅くなっている。西側~北側は遺構検出面までやや深く、その基本土層はFig.5に記したが（ローム地山上面の上に薄く二次堆積の包含層がある）、南側から東側は遺構検出面まで浅く、地表下は近年の盛土（表土）のみであり、その直下でローム地山上面となる。現地形に沿って南側の遺構面が高くなり、北西側が低くなっている。遺構の遺存度は、全体に削平が及ぶものの東側がやや良好であり、西側の削平がより顕著になっている。

検出遺構は削平の割には多く、竪穴住居1 (+3?)、土坑（竪穴状遺構含む）5、井戸2、(+α)、柱穴多数を検出した。柱穴からは掘立柱建物を5 (+α) 棟復元した。竪穴住居は、カマドを有し主柱穴の無い型式のSC022の他は、貼床（掘り方痕跡）のみである。竪穴遺構には、12世紀の長方形竪穴SX021と、古墳時代後期の梯子形竪穴SX122があるが、後者は類例・性格が不明である。井戸は径の小さい素掘りのSE012と、径が大きく「降下取水式」の可能性があるSE023がある。柱穴は、覆土の特徴（黒褐色、暗褐色、褐色）から幅広い時期が想定され、復元した掘立柱建物は古墳時代から中世の幅広い時期であろう。その他、各遺構覆土から縄文後晩期や弥生早

- |  |   |
|--|---|
| 0 パラス（上部）～鶴土（褐色砂質土）、下面是アスファルト土層                | 13 14層よりやかに赤い色、14層より砂質、にくい褐色土（砂利シルト）            |
| 1-2 鶴土～茶褐色砂色・小ガラ・マリエブロック（2m=砂多い、20cm褐色砂質土多い）   | 12-13 わざかに灰白色地、しまりやや甘い、遺構片・泥合せ                  |
| 3 1-2層～褐色砂質土                                   | 14 褐色～褐色土、真鍮金合、15層より耕くしまり（やか）甘い、地質異常、透水性や高いシルト質 |
| 4 しまりやや甘い質、にじみ茶褐色土、にじみ茶褐色土・マリエブロック（2m=砂質褐色砂質土） | 15 褐褐色土（にじみ褐色土・茶褐色土）、透水性や高い地質（2m=褐色土）、耕くしまりあり   |
| 5 墓石・骨格含ローム土（褐色砂質土）                            | 16-17 16層より褐色土（2m=褐色土）、耕くしまりあり                  |
| 6 墓石・骨格含ローム土（褐色砂質土）                            | 18 褐褐色土（ローム土）～褐色土（ローム土）                         |
| 7 墓石・褐色土（ローム土）（にじみ）色のブロック土                     | 19 褐褐色土（ローム土）～褐色土（ローム土）                         |
| 8 土坑と柱穴同じ（褐色砂質土）                               | A 地山ローム（褐色～褐色砂質ローム土）                            |
| 9 にじみ褐色～褐色土（褐色砂質土）                             |   |
| 10 褐褐色土・褐色砂色～土マリエブロック・灰基盤色砂質土                  |   |
| 11 にじみ褐色（～褐色砂質土）（褐色土土質）                        |   |
| 12 ない褐色（～褐色砂質土）（褐色土土質）                         |   |
| 13 14層よりやかに赤い色（褐色土）                            |   |
| 14 14層よりやかに赤い色（褐色土）                            |   |

表1 調査区北西壁面土層図 (Fig.5) 注記

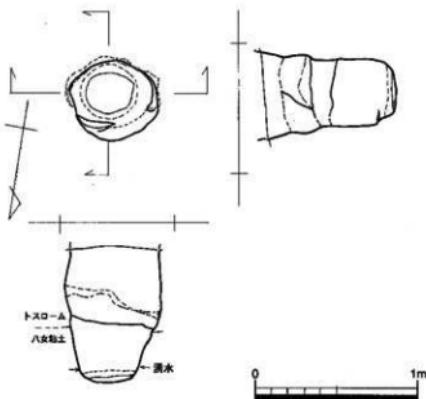


Fig.6 SE012実測図 (1/30)

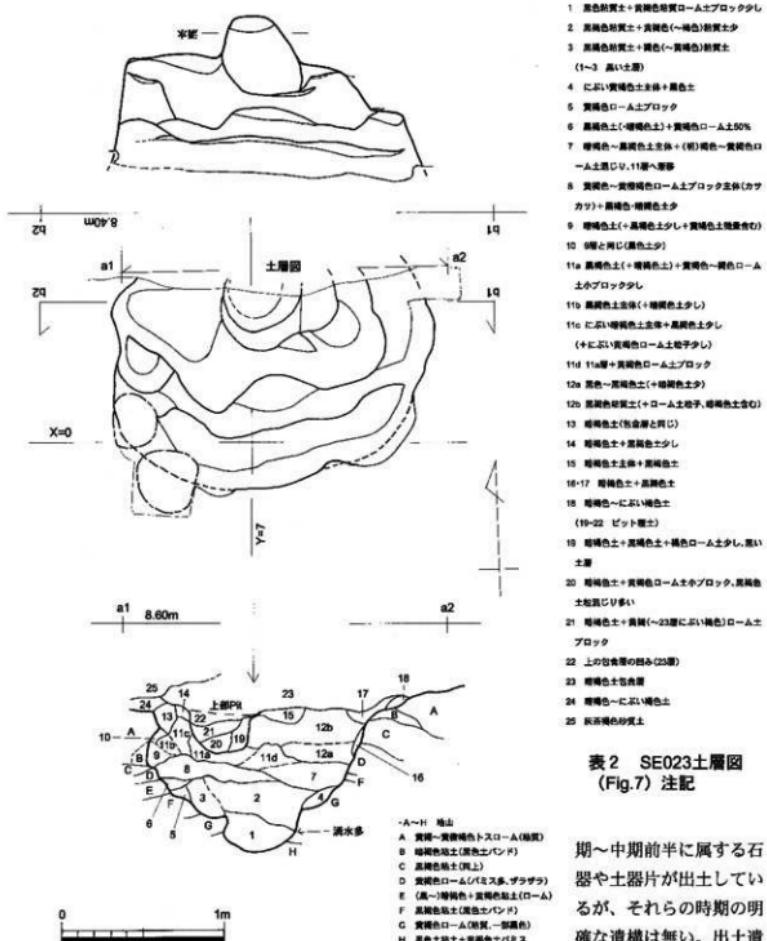


Fig.7 SE023 実測図土層図 (1/30)

弥生土器、古墳時代～古代の土師器・須恵器、中世の土師器・国産陶器・輸入陶磁器、石器、石製品(古墳時代の砥石)が出土している

## (2) 検出遺構

### ・井戸 (SE)

SE012 (Fig.6, PL.3-Ph.11)

表2 SE023土層図  
(Fig.7) 注記

期～中期前半に属する石器や土器片が出土しているが、それらの時期の明確な遺構は無い。出土遺物の総量はパンケース3箱程度である。繩文土器、

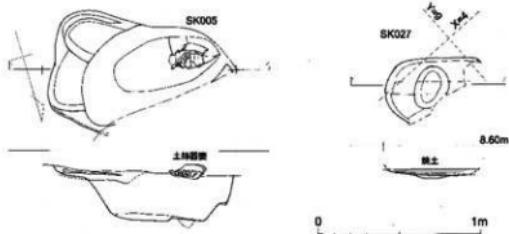


Fig.8 SK005, SK027実測図 (1/30)

んど皆無に近く、時期が推定し難い。ただし、上層が暗褐色気味の覆土であったので、古墳時代後期以降、古代までの時期幅に入るだろう。

#### SE023 (Fig.7, PL.4-Ph.15)

II区北側で検出。北側は一部調査区外になるが、南北1.7m、東西2.0mの楕円形平面と推定。井戸側が想定される落込みは平面形の中央よりもかなり北側に偏っている。土層断面を見ると (Fig.7下段)、下層に井戸側があったと想定できる層 (1,2) があるが、これより上は井戸側落込み痕跡、または井戸側抜き取り（再掘削）痕跡が無く、またレンズ堆積でもない。下層の井戸側を抜いた後に埋め戻した土層堆積の可能性がある。その場合、6,3,2,4層レベル (7.65m前後) より上部は井戸機能時からオープンであった可能性がある。井戸側が北に寄っていることもあるが掘り方斜面は南側が緩やかで途中階段状になっており、南から井戸側部へ降下できるような状況である。井戸側設置部上端レベルより上がオープンであった可能性と合わせて考えると、北部九州ではあまり一般的ではない「降下取水式」の井戸（高野陽子2008）であった蓋然性を考え得る。井戸の時期であるが、出土遺物が非常に少なく決め難い。「降下取水式」井戸は、周辺での類例は少ないが、博多区那珂遺跡群102次（第1021集）のSE120やSE147や福津市手光於縁1号井戸（弥生中期後半）（註2）もその可能性がある。手光於縁を除く那珂の事例は、いずれも弥生終末期（SE120はIA期、SE147はIB期にそれぞれ発見、編年は久住猛雄1999による）であり、本例もその時期の可能性がまずは考えられる。

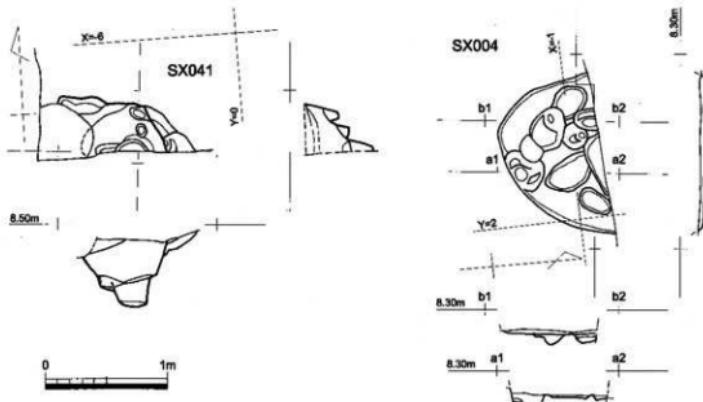


Fig.9 SK041, SX004実測図 (1/40)

I区で検出。井戸とするにはやや小さい感もあるが、他の柱穴よりは明らかに深く、また湧水点まで掘削され、八女粘土上面やや上になるが壁が僅かにオーバーハングしているため素掘りの井戸とした。上面の径は50×58cm、深さは84cmの遺存。遺物がほとんどの無い近く、時期が推定し難い。ただし、上層が暗褐色気味の覆土であったので、古墳時代後期以降、古代までの時期幅に入るだろう。

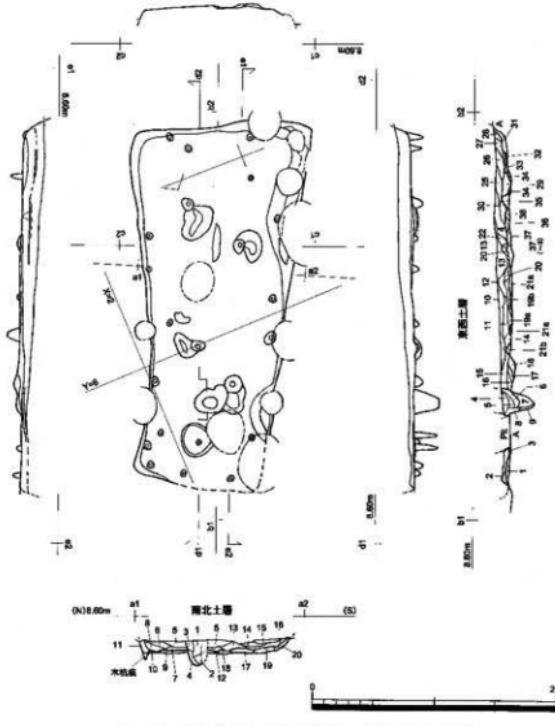


Fig.10 SX (SK) 122実測図・土層図(1/40)

## SX(SK)122地盤図

- 1 砂質土
- 2 黒褐色一暗褐色土、4層より多い
- 3 黑褐色土(1層より多い)+ローム土粒子
- 4 にない褐色土一黒褐色土(2層より褐色土少)
- 5 黑褐色土+ローム土粒子(少額含)
- 6 砂質土+ローム土+褐色土
- 7 砂質土+褐色土+ローム土ブロック20~30%、炭化物含
- 8 砂質土+褐色土+20%炭
- 9 にない褐色土(=暗褐色)+褐色土ローム土ブロック多(80%)
- 10 黑褐色土
- 11 にない褐色土+ローム土ブロック
- 12 にない褐色土+褐色土(=褐色土ローム土(にない褐色土ローム土+褐色土))
- 13 黑褐色土+ローム粒子、小ブロック少し
- 14 黑褐色土+二三の褐色土
- 15 しまりあり、高さ差は確かなないし層にない
- 16 黑褐色土(=にない褐色土)実体+にない褐色色ローム土ブロック+褐色土少
- 17 にない褐色色ローム土ブロック70~80%+褐色土および褐色土
- 18 17層とほぼ同じ(18層の方が褐色土や多い)
- 19 褐色+にない褐色ローム土+褐色土汚れ
- 20 にない褐色色ローム土ブロック+にない褐色土少

- A 黑褐色ローム土(黒褐色土), 岩山
- 1 黑褐色土+にない褐色ローム土ブロック40%
- 2 黒一褐色土+褐色土2%
- 3 黑褐色ローム土ブロック(=褐色色土)  
(4~9 ピート層土層、4層は15層より褐色色)
- 4 黑褐色土、しまりあり
- 5 黑褐色土+ローム土粒子少し、ローム土ブロック少し
- 6 砂質土、ローム土粒子多め、ローム土ブロック少し、しまりやすい
- 7 しまりなし、褐色色土質、ローム土粒子+小ブロック10%以上(以降の層)
- 8 黑褐色土(=褐色土)+褐色色ローム土ブロック20%以上(=含む)
- 9 しまりなし、褐色色土質
- 10 黑褐色土(=褐色色土)にない褐色色土、土粒粗少、黒少なし、1層より多い
- 11 黑褐色土(=にない褐色土)褐色色土+ローム土粒子、小ブロック10~20%、11~13層より多い
- 12 黒一褐色土、やまらりあり、にない褐色ローム土(=褐色色土)10~20%、11~13層より多い
- 13 塵(=風)褐色土、炭化あり、ローム土+小ブロック+褐色土少
- 14 黑褐色土+褐色土、褐色土+褐色土合む
- 15 黑褐色土(=黒褐色土) 黑褐色土+褐色土少
- 16 黑褐色土(=にない褐色土) (にない褐色色土)17層より層離す
- 17 にない褐色色ローム土ブロック+褐色土
- 18 22層と同様、褐色土+褐色土+褐色色ローム土ブロック30%、褐色土+褐色色土+褐色土+褐色土少
- 19 にない褐色土+ローム土粒子+小ブロック、しまりやすい層
- 20 褐色土+にない褐色土(=褐色色土)ローム土30%
- 21 にない褐色色ローム土ブロック+褐色土
- 22 にない褐色土+にない褐色色土+にない褐色土少し、黒褐色土
- 23 黑褐色土、ローム土粒子含む(にない褐色土)12層より多い
- 24 (褐色土)にない褐色土(やまらり)+ローム土粒子+小ブロック+褐色土少
- 25 黑褐色土+にない褐色色土+小ブロック質子+ローム土粒子
- 26 黑褐色土+にない褐色土(=褐色土) +褐色土少
- 27 にない褐色土(=褐色土) +褐色土少
- 28 黑褐色土+にない褐色色土+小ブロック質子+ローム土粒子
- 29 しまりなし、褐色色土+にない褐色色土+小ブロック質子
- 30 黑褐色土+にない褐色色土+小ブロック質子+ローム土粒子
- 31 にない褐色色ローム土ブロック+褐色土
- 32 28層と同じ
- 33 黑褐色ローム土ブロック+にない褐色土20%(+黒質が層の上部にあり)
- 34 ローム土ブロック主体+褐色土
- 35 にない褐色色ローム土ブロック(褐色色土+土質子)+にない褐色土30%
- 36 にない褐色土+ローム土粒子+小ブロック、しまりやすい層
- 37 褐色土+にない褐色土(=褐色色土)ローム土30%
- 38 明黄褐色ローム土ブロック、褐色土30%

表3 SX122土層図 (Fig.10) 注記

僅かな出土遺物のうち (Fig.21-1~4)、4の縄文土器はまず除外され、2の弥生中期土器も最上層出土であり摩滅が激しい小片であり混入であろう。2の須恵器壊身立ち上がり部破片は細片であり、上層には掘削途中で気づかなかつた新しいピットが複数あったとみられ、混入の可能性を排除できない。また古墳時代後期の「降下取水式」井戸も類例が不詳である。消去法になるが、1の在地系器台片は弥生終末～古墳初頭であり、破片であるが摩滅がありなく、これが時期を示すとすれば最も矛盾がないと考えられる。

## &lt;文献・註&gt;

高野陽子2008「弥生時代から古墳時代前期における井戸とその関連遺構－京都・滋賀を中心に－」『井戸再考～弥生時代から古墳時代前期を対象として～』第57回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 埋蔵文化財研究会

久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』IX 庄内式土器研究会

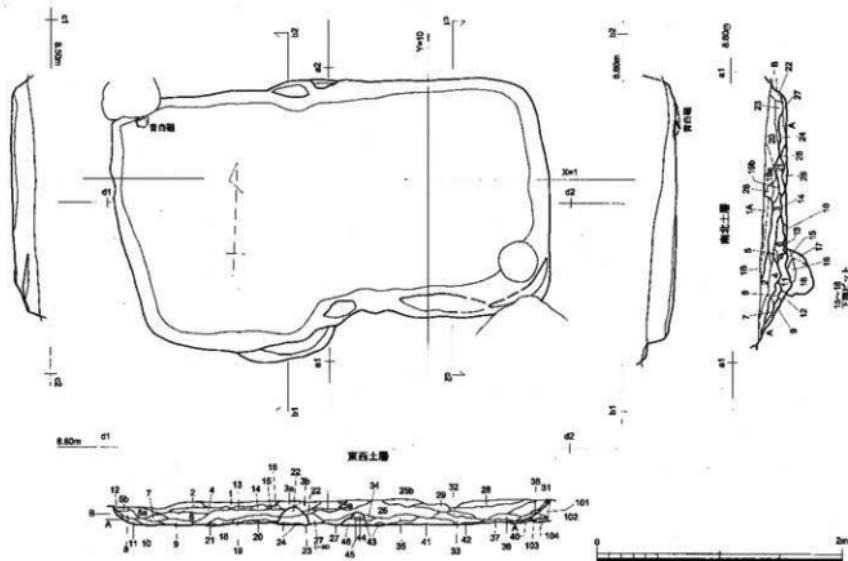
久住愛子・久住猛雄2008「九州I－福岡県下における弥生時代から古墳時代の井戸について」『井戸再考』(前掲)

(註2) 手光於縁1号井戸は非常に浅く、井戸と報告されるが木器貯蔵施設など別の機能を持った湧水土坑とすべきかもしれない(久住愛子・久住猛雄2008)。また那珂遺跡群74次(第673集)の05号遺構(井戸)は奈良時代(8世紀)であるが、報告書の断面図では不明だが、平面図を見ると井戸南西側から降りてくるようなステップが存在する(調査者の本田浩二郎より教示)。「降下取水式」の可能性もあるが、有田223次の例とは平面形やステップのあり方が異なり、また有田例は覆土の土色から奈良時代までは下らない。いずれにしても、「降下取水式」は九州では注意されておらず、類例の把握が必要である。

## ・土坑(SK)

SK005 (Fig.8左, PL.3-Ph.9・10)

I 区北西壁際で検出。一部調査区外となるが、推定75×120cmの土坑となろう。ただし、東側と北側(?)のテラス状部分は別遺構の重複の可能性もあり、その場合は65×98cmの楕円形土坑となる。検出面直下の土坑西側上層から土師器甕が出土した。底面はやや凹凸があり、ちょうど上層で甕が出土した位置の下部が小ピット状となる。土師器甕(Fig.21-22)は単体であり時期を限定しにくいが、8世紀後半～9世紀前半の型式か。上層出土であるが、遺構覆土も黒褐色というよりは暗褐色気味であったので、古代の遺構とみて問題ない。



SX(SC)081東西土層

- 1 帯緑色～帯紅色土(10YR)。少しより、ローム粒子等  
の土(スルメ土)と見分け難い。

2 帶褐色土(10YR)。土温が高め(5-7YR)。しまり、土里小片  
含む。(10月)

3 帯褐色土(10YR)。ローム土粒子少々含む

4 帯褐色土(10YR)。ローム土粒子含まず。土粒細  
粒度がむかわし

5 帯褐色土(10YR)。やや茶葉色土(12YR)と見らい。  
こぶ状根出。土中ロック状。糞便臭を含む

6 帯褐色土(10YR)。土温が高め(5-7YR)。

7 帯褐色土(10YR)。やや土中に帯褐色土。色土(10  
YR)と見らい。

8 帯褐色土(10YR)。少しよりやや  
の土(スルメ土)と見分け難い。

9 やや赤褐色土(10YR)。腐殖土層(土温より高い)に帯褐色土(10  
YR)と(2-3cm)重ね土。土温よりやや低め(10-12YR)。

10 やや赤褐色土(10YR)。土温よりやや低め(10-12YR)。

11 帯褐色土(10YR)。土温よりやや低め(10-12YR)。

12 帯褐色土(10YR)。土温よりやや低め(10-12YR)。

13 帯褐色土(10YR)。土温よりやや低め(10-12YR)。

14 帯褐色土(10YR)。土温よりやや低め(10-12YR)。

15 帯褐色土(10YR)。土温よりやや低め(10-12YR)。

16 帯褐色土(10YR)。土温よりやや低め(10-12YR)。

17 帯褐色土(10YR)。土温よりやや低め(10-12YR)。

18 帯褐色土(10YR)。土温よりやや低め(10-12YR)。

19 帯褐色土(10YR)。土温よりやや低め(10-12YR)。

20 帯褐色土(10YR)。

21 ローム土(ロック状)。帯褐色土

22 ローム土(ロック状)。帯褐色土

23 ローム土(ロック状)。帯褐色土

24 帯褐色土(10YR)。ローム土(八木坂土に近い)。やや赤

A に(二)帯褐色土(やや赤)。ローム土(八木坂土に近い)。やや赤






表4 SX (SC) 021土壤圖 (Fig.11) 註記

SK027 (Fig.8有、Ph.4-Ph.16)

Ⅱ区南側壁際で検出。一部調査区外になるが、およそ42×70cm前後の楕円形となろう。検出時に焼土（明赤褐色土）多く混じった状況であった。皿状断面で中央が少し凹むが、焼土も中央に少し落ち込む。炉址か。浅い竪穴住居が削平されて中央炉が残ったという可能性があるが、その場合にこれに伴う柱穴は不明である。遺物も出土せず、時期も不明。

SX041 (Fig.9左、PL.2-Ph.7中央)

I区南西隅付近で検出。当初は東西1.3m(以上)の土坑と考えたが、調査区南西隅側は別造構(柱穴)で、残りも二、三の柱穴の重複か。西側上段がテラス状になるが、下部は柱穴状であり土坑としたが二段掘りの柱穴だろう。柱穴ならば東西100cm×南北推定70cmの大型柱穴となり、柱径は20cm前後だが比較的大型の建物が考えられる。対応する柱穴は調査区内には無い。出土土器(Fig.21-5)は古墳中期前半頃の粗製丸底鉢の口縁部であるが、これが伴うとするとSC101の時期と齋船が生じる。

• 積穴狀不明遺構 (SX)

SX004 (Fig.9右、PL.2-Ph.5左中央)

I 区北側壁際で検出。南北80cm以上×東西130cmの浅い凹み状の土坑ないし竪穴。竪穴住居の掘方下部の一部残存の可能性もあるが確証はない。底面で柱穴を複数検出したが、上部から掘り込まれていた物がある可能性も否定できず、伴うピットの存在の有無や前後関係は不明。これらの柱穴に掘立柱建物を構成するものがあるが、その関係も不明確である。SX004に確実に伴う遺物はない。

### **SX122 (Fig.10, PL.6–Ph.27)**

II区中央西側で検出。調査時は「SK022」としたが、豎穴住居「SC022」との混乱を避けるために整理時に名称を変更した。N-70°-W（以下、方位は磁北）を長軸線とする平面逆梯子形の土坑

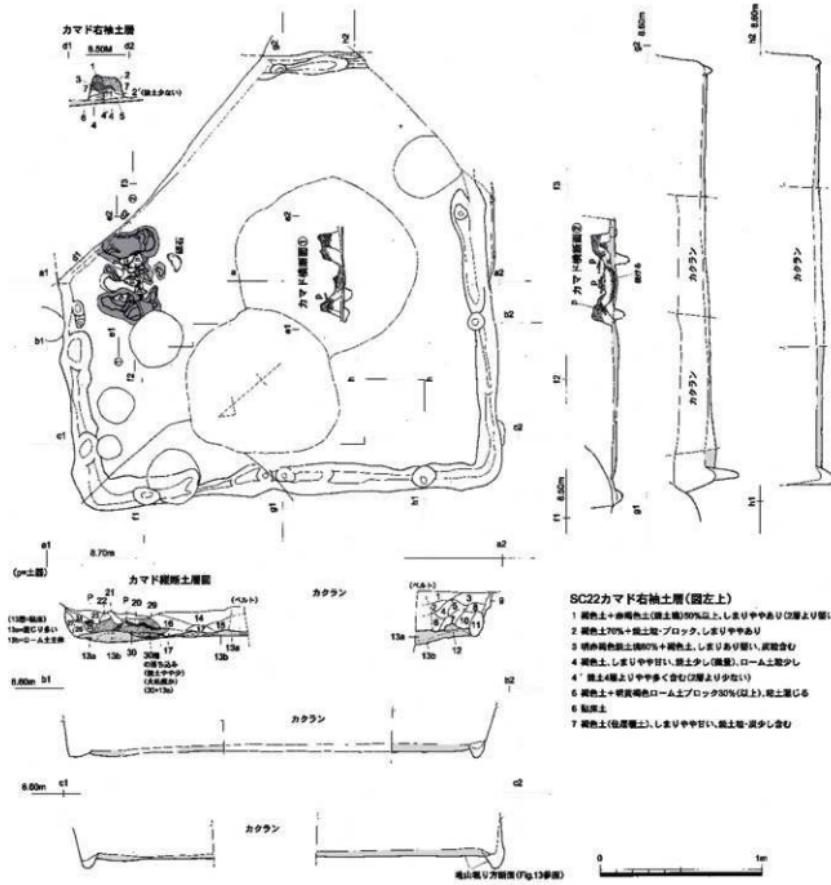


Fig.12 SC022実測図・土層図 (1/30)

SC022南北主關

1. まっ青い暗緑色と、まろやかさ、柔らかさを兼ね備え、やわらかな  
緑色の土色合

2. 「薄緑」の名前が付いた土色合。土色合上位に「薄緑」で「薄緑」  
の土色合をもつてやや青みを帯びたやわらかさや、出でやすさを  
もつた土色合

3. 「薄緑」の名前が付いた土色合。やわらかく、出でやすさを  
もつた土色合

(4) 「薄緑」の名前が付いた、黄緑色の土色合を示す。底色は  
緑色合で、表面はやや白みをもつた、しまやや白い土色合

4. 「薄緑」の名前が付いた、黄緑色の土色合を示す。底色は  
緑色合で、表面はやや白みをもつた、しまやや白い土色合

5. 「薄緑」の名前が付いた、黄緑色の土色合を示す。底色は  
緑色合で、表面はやや白みをもつた、しまやや白い土色合

6. 例に「薄緑」の土色合をもつて、しまやや白い、清楚な  
緑色の土色合

7. 「薄緑」の名前が付いた、黄緑色の土色合を示す。底色は  
緑色合で、表面はやや白みをもつた、しまやや白い土色合

8. 嫩緑色の土色合をもつてやわらかさをもつた、柔らかさを  
もつた土色合

9. 「嫩緑」の名前が付いた、黄緑色の土色合を示す。底色は  
緑色合で、表面はやや白みをもつた、しまやや白い土色合



表5 SC022土壤图 (Fig.12) 注释

ないし竪穴。全体に削平が著しく、西側短辺の立ち上がりは失われている。全長310cm、小口長辺144cm、小口短辺110cmを測る。下端壁際と底面の一部に杭状ピットが検出された。壁板材が存在し、それを杭状柱材で支えるという構造が考えられる。ただし土層(PL.6-Ph.26)からは壁材痕跡は不明確で(南北土層11層は壁材痕跡の可能性あり)、廃棄時に解体撤去されたものか。ただし南東隅から西100cm前後までの南側壁部は2段状の立ち上がりとなる。もう少し大きく幅広い遺構であれば小型の竪穴住居ないし竪穴建物が考えられるが、

このSX122の形状は細長く、全く異なる。また底面の一部に、木質(底板?)ないし蓆などの黒色有機質痕跡が遺存していた(PL.6-Ph.28)。壁を構築するということから、ある種の貯蔵施設(貯蔵用竪穴土坑)や、細長く小口部の片側が広く反対側が狭いことから木棺墓に類する墓の可能性も考え得る(墓の場合、構造上は木棺墓に近い)。墓とする場合、居住城に同時期(SC022がほぼ同時期の可能性あり)に造営される理由が不明であること、副葬品と思しきものがないこと、墓壙であればより深いはずなので(経験上、単独なら竪穴住居より深い場合が多く、墳丘上からであれば浅いが墳丘の存在を暗示する周溝なども無い)、それはあまり無さそうである。消去法的に地下式の貯蔵施設の可能性を考えておくが、類例が全く不明であり、今のところ性格不明の竪穴としか言えない。出土土器(Fig.21-6~10)には、6世紀代と考えられるもの(8~10)と、8世紀代と考えられるもの(7・8)がある。覆土が全体的に黒褐色気味であったことから、覆土の時期傾向から前者が伴う可能性がより高いが(重複する柱穴が幾つかあり、後者は混入の可能性も考えられる)、いずれも小片であり確実に伴うものではない。

#### SX (SC) 021 (Fig.11, PL.23-Ph.25, 土層写真PL.6-23,24)

II区中央で検出。N-85°-E前後を長軸線とする長方形竪穴。東西356cm、南北194~224cmを測る。長方形としたが、南辺は西半分が南側に突出するように広くなる。これと関連して南辺側は壁の傾斜が緩やかで、東側と西側の一部が段状になっている。底面に柱穴や炉址、カマドなどの施設は無いが、土層断面を見ると(東西土層22・23層および44~46層、南北土層25・26層)、中央に土で構築された馬蹄形の堤状施設があった可能性がある。焼土などは無く、カマドではないだろうが、その性格は不明である。出土遺物(Fig.21-12~21)には古墳時代中期~後期、飛鳥時代(7世紀)も含まれるが、12~15から12世紀中頃~後半の可能性が高い。時代から中世の方形竪穴土坑とも言えるが、本例の場合、住居なのか貯蔵施設であるのか不明である。

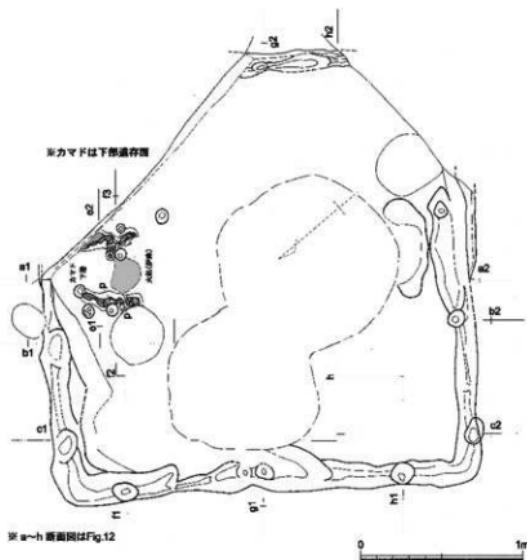


Fig.13 SC022実測図(2)(掘り方)(1/30)

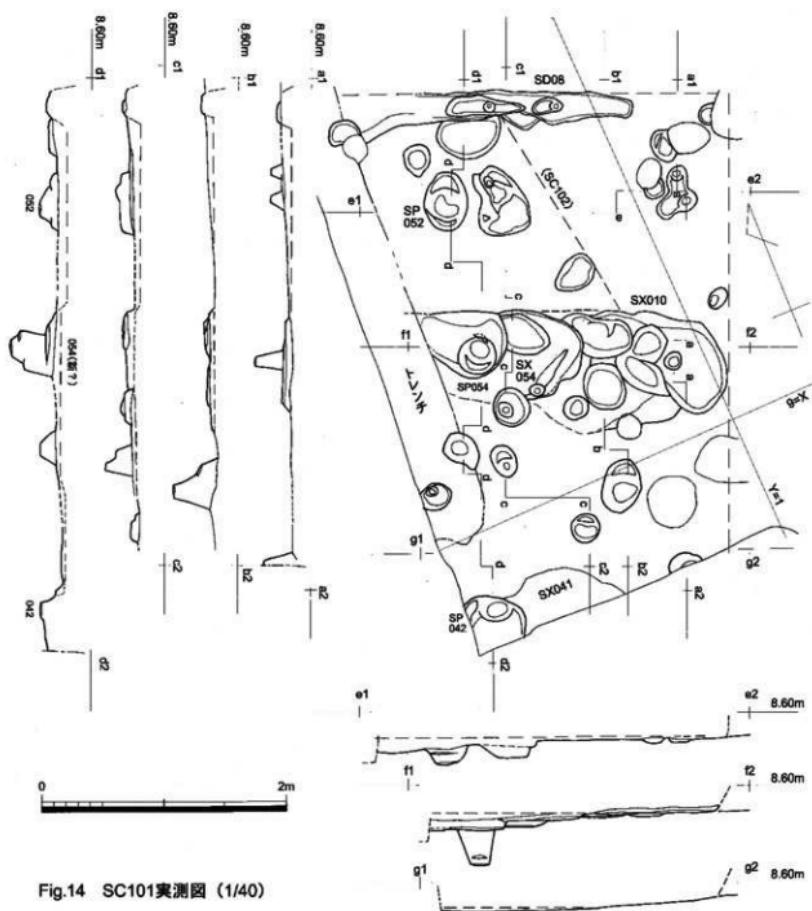


Fig.14 SC101実測図 (1/40)

## ・竪穴住居 (SC)

SC022 (Fig.12-13, PL.5-PL.18~22)

II区中央東側で検出。南東側と東側の一部が調査区外となるが、 $2.7 \times 2.7\text{m}$ の正方形竪穴住居。カマドを軸とするとN-39°-Eの方位。主柱穴が見あたらないが、壁際に壁溝が廻り、壁溝内に等間隔ではないが杭状の小柱穴があるので、平面形が小規模ということもあり壁立式で屋根を支えていたものと考えられる。北東側壁際の屋内にカマドを構築する。カマドは灰白色や黄灰色の通有の粘土を用いず、焼土塊を主体とした土で固めて構築されている。カマドの構築は2層構造で、上面と下面で分けて平面を記録した（下面是Fig.13）。この2層構造は単にカマド構築時の段階に過ぎないとみる

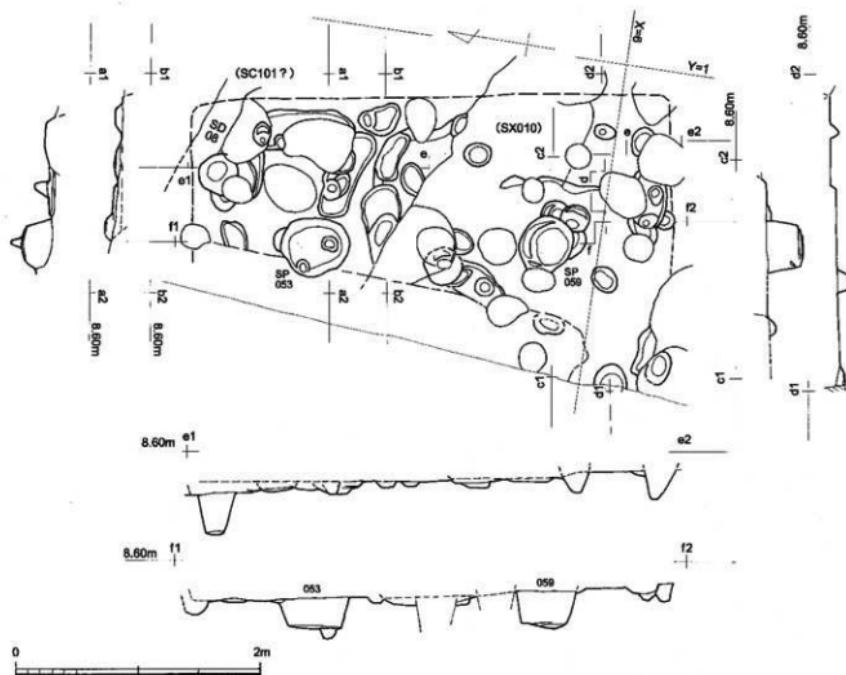


Fig.15 SC102実測図 (1/40)

ことも可能である。しかしカマド中央の焼土面が上下2層あるように見え、下層が貼床面と同レベルで本来の火処と見られるが、その上に焼土が少ない4cm前後の間層があり、その上層に再び焼土ブロックが土器片とともに廃棄された焼土面が存在する。上層焼土面は、一つの可能性としてはカマド上層部を作り直しとみて、その際のかさ上げされた二次燃焼面（火処）と考えるか、あるいは構築土に焼土塊を含むカマド天井部をカマド廃棄時に壊したものと落下したものと見ることも可能である。後者の場合、上下の間層をどう理解するかが問題である。カマド横断土層（Fig.12）は平面図から起こした復元模式図であり、調査時の記録と観察ではどちらの可能性も排除できなかった。また上層焼土面に同一個体の壺形土器破片が多く廃棄されていた（PL.5~PL.20）。完形にならないが、意図的に破碎して一部を廃棄したとみられ、カマド廃棄時の祭祀の可能性が高い。カマドが構築された箇所の壁のみ壁溝が途切れる。煙道部分を外に突出する形で掘り込んでいないが、煙道はカマドと壁の間に何らかの形で設置されて煙を出していたものとみられる。ローム地山ブロックを再度固めた厚さ2~8cmの貼床が認められるが、掘り方下面にはあまり凹凸はない（Fig.13）。また住居の廃棄時には、カマドを意図的に壊して祭祀を行った可能性があることを述べたが、土層を見ると（中央が大きく擾乱され不明確だが）、中央が凹む通有のレンズ状堆積ではなく、意図的な埋め戻しが行われた可能性がある。また穴が小さく、遺物が非常に少ないとから、「住居」ではなく、「竈屋」のような炊飯調理専用の建物であった可能性もある。出土土器（Fig.21~23~30）は、須恵器はⅢA期（須恵器編年は

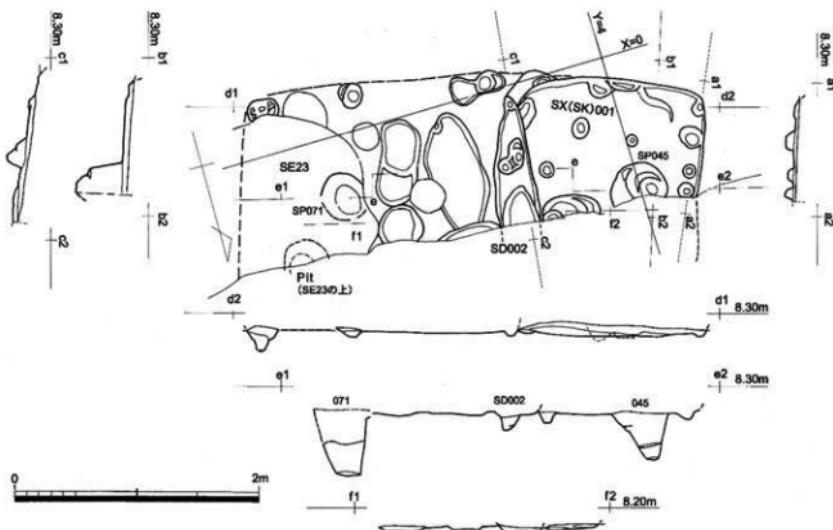


Fig.16 SX001 (SC103?) , SD002実測図 (1/40)

小田富士雄氏編年で記述する)

(25) ないしⅢA期新相～ⅢB期(23)、土師器は鉢  
壺類にやや古い特徴のもの

(28) があるが、他の2点は  
口縁が内湾する須恵器のⅡ期  
(MT15)～ⅢA期(TK10  
～MT85)に多い型式である。

小型甕(27)のみは7～8世  
紀の可能性があるが、これは  
上面出土である。カマド廐棄  
時の甕破片(26)は、同一  
個体の可能性がある口縁部片  
(24)と合わせて考えると、  
ⅢB期併行には下らずⅢA期  
併行がより妥当である。した  
がってSC022はⅢA期=6世  
紀中頃と考えておきたい。

SC(SX)101 (Fig.14, PL.1-Ph.3)

I区南西部で検出した。当初検出時に、周囲がローム地山上面になるが、この範囲だけ黒褐色土な

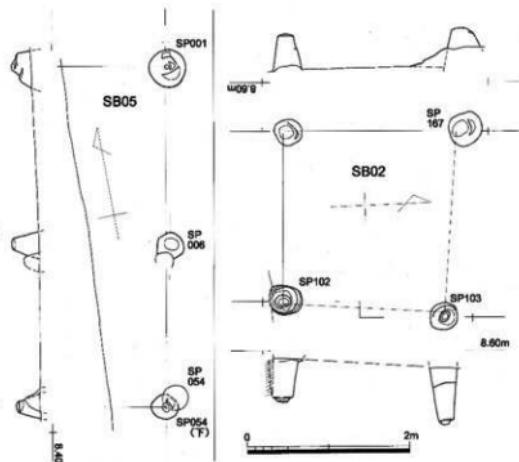


Fig.17 SB02, SB05実測図 (1/60)

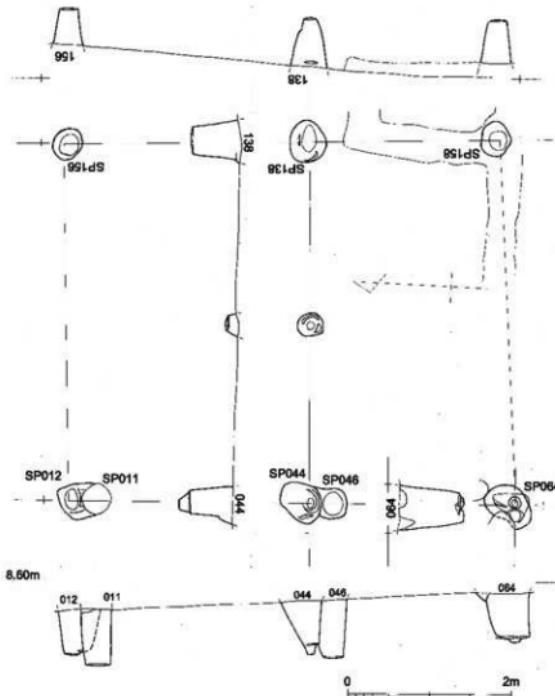


Fig.18 SB01実測図 (1/60)

いし暗褐色土がシミ状あるいは斑状に分布していた状況であった。これらを全て確実な地山まで掘削したが、SD08（壁溝か）を北限とする東西3.5m（以上）×南北4.5m（以上）の範囲の凹凸をひろって竪穴住居の貼床下の掘り方の可能性があるものと捉えた。SD08に平行してSX010・SX054とした浅い土坑が重複したような凹みがある。竪穴住居とすれば、これが掘り方中央になるか。主柱穴は不明確だが、SP042とSP052がその可能性がある。あるいはSD08とSX010・054の間がベッド状構部分で、両柱穴の間が住居中央土間部であった可能性もある。前述の柱穴が2本主柱の場合は東西4.0m前後の竪穴になる。検出時が床面だった可能性があるが、炉址は不明である。重複関係が不明確なものが多く、押図 (Fig.14) に示したピットには関係ないものがある可能性がある。

SX101には、これと異なる方位で、さらに下部の凹凸があったが、これをより古い竪穴住居掘り方の痕跡と考え、それを抽出してSX(SC)102とした (Fig.15)。SC101の住居形態が推定の通りであれば、弥生後期後半～古墳初頭の幅内であるが、伴う出土遺物は不明である。ただしその場合、SX041を出土土器片から古墳中期前半と推定したこととは齟齬が生じる。なおSC101は、SD08の直交軸を長軸とすれば、方位はN-23°-Wとなる。

#### SC(SC102) (Fig.15, PL.1-Ph.3)

前述の通り、SX101下部の異なる方位の凹凸をSX(SC)102とした。押図 (Fig.15) には、伴う可能性のある凹凸とピットを抽出したが、関係のないものが含まれている可能性がある。

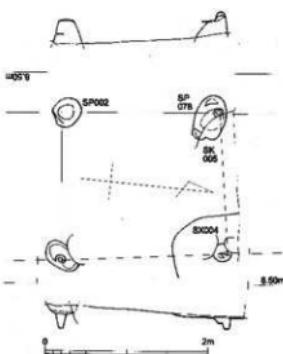


Fig.19 SB04実測図 (1/60)

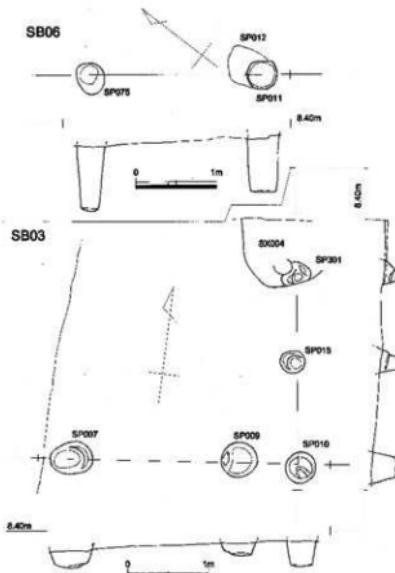


Fig.20 SB06, SB03実測図(1/60)

東側、SE023との間にもいくつかの不整形の凹みがあり、これらもSX001と合わせて竪穴住居の方の痕跡と考えた。これらをまとめてSX(SC)103として東西3.8mの竪穴住居を復元した。SE023上にあったピットはこれに伴う可能性。SP071とSP045が主柱穴の一部か。SE023が弥生終末前後と考えられるため、SC103が作られるのは井戸が埋没してかなり経つからであろうから、SX103は古墳時代中期以降であろう。SP071・SP045を主柱とした場合、正方形4本主柱となると想定され。竪穴の南北は4.5m前後に復元できる。カマドは北辺にあることが多いから、調査区外に予想される。

#### ・掘立柱建物（SB）

掘立柱建物は、調査が狭い範囲を反転したこと、柱穴が幾つも狭い範囲で重複していたことなどから現場で復元できたものは無かった。整理過程において、図面上で蓋然性の高いものを抽出し、想定復元した。その他にも復元しうる柱穴の組み合わせはあるが、より蓋然性があるもののみ報告する。

SB02 (Fig.17右) II区で検出した 1 × 1 間の建物。N-85° 前後-W。柱の芯々距離で東西2.13~2.27m × 南北2.0~2.15m。柱穴の多くはやや黒い暗褐色の覆土。SC022を切り、SX021に切られる。SP167より短脚の須恵器小型高杯片が出土し (Fig.22-3)、7世紀 (IV~VI期) の可能性。

SB05 (Fig.17左) I区西側で検出。南北2間 (4.2m) の柱列で、おそらく西側に折り返す建物。SP001から土師器壺片が出土し (Fig.22-4)、これが伴えば8世紀代か。その場合、南側の柱穴 SP054(下)はSC101の下としているが、実際はSP054 (Fig.14) とともにSC101 (弥生終末?) よりも新しいとする必要がある。SB05に伴うのは、SC101に関連付けたSP054 (Fig.14の断面d1-d2 参照) かもしれない。そのため、方位はN-8.5~10° -Eとしておく。

SB01 (Fig.18) I区とII区にまたがる。1 × 2 間の建物で、南北5.37~5.5m × 東西4.36~4.5mの

南北3.9m前後、東西2.4m以上の方形住居が復元できる。SP053とSP059が主柱穴の可能性があり、これが2本主柱とすれば、東西は3.0m前後か。その場合、平面プランがやや小さすぎるるので、周囲にベッド状造構があったがその痕跡も完全に削平された可能性も考え得る。SC (SX101) が弥生時代終末を中心とする時期の可能性があり、SC102が長方形住居でそれ以前とすれば、詳細は不明だが、弥生後期~終末の範疇であろう。SP053とSP059を長軸とすれば、方位はN-9° -Wである。

SX001 (SX013?、SD002ほか) (Fig.16、PL.2-PL.8中央右)

I区北側で検出した。まずSD002はSX001を切り、方位も若干異なるのでSX001より新しい溝であろう。削平が著しく溝の底部付近しか残っておらず、時期も不明である。方位はN-10° -E。SX001は東西1.6m × 南北1.7m以上の略方形の凹みで、竪穴住居の掘り方下部であろう。西辺にピット列が、南辺に壁溝の名残のような凹みがあることも注意される。SD002より

第223次調査

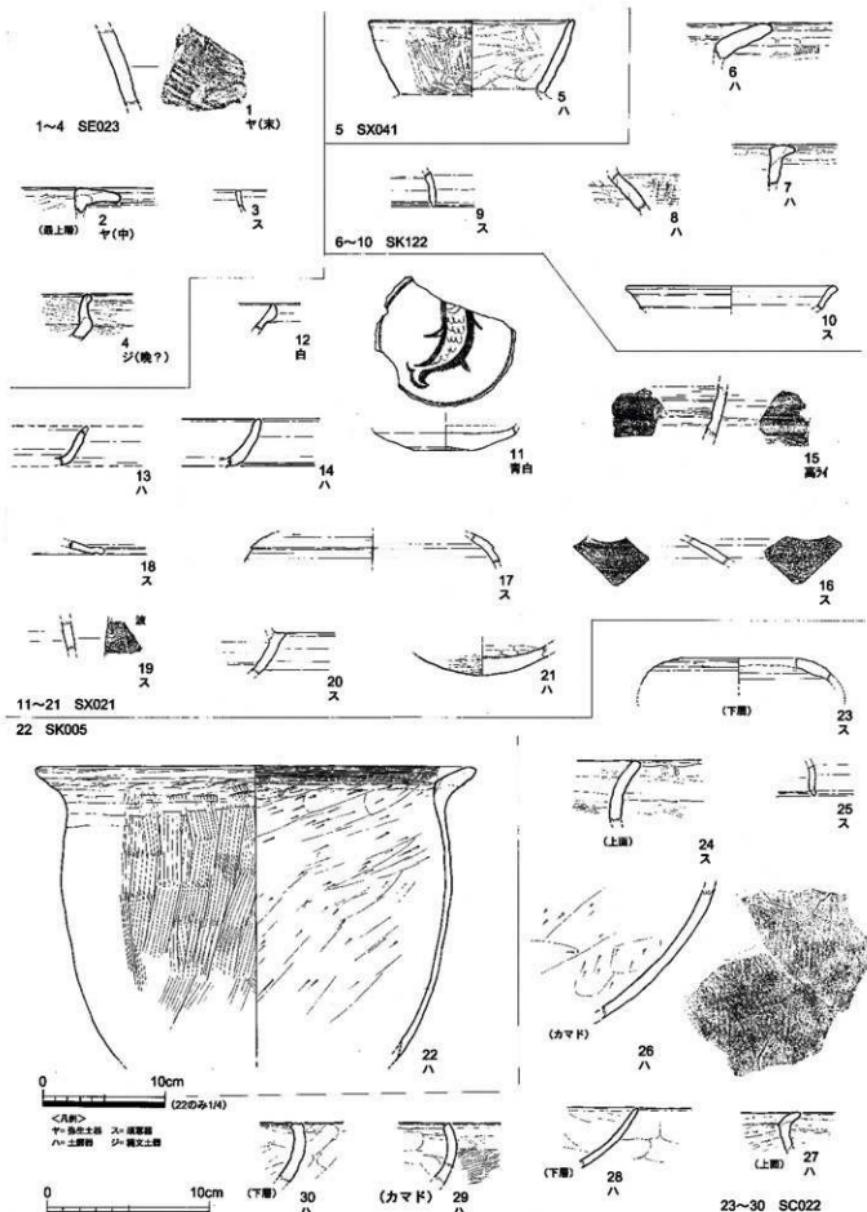


Fig.21 SE023,SX041,SX122,SX021,SK005,SC022出土遺物実測図 (1/3, 22のみ1/4)

第223次調査

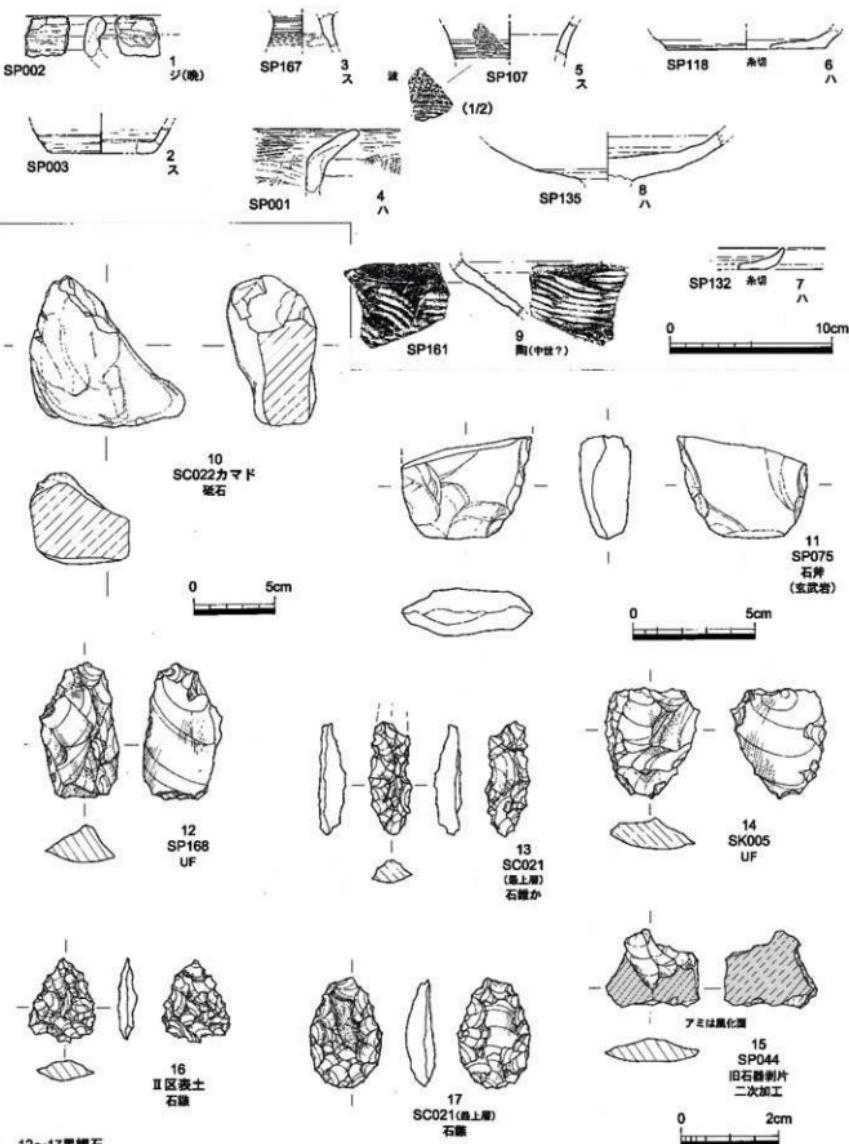


Fig.22 ピット出土遺物実測図 (1/3) , 各遺構出土石器・石製品実測図 (1/3,1/2,1/1)

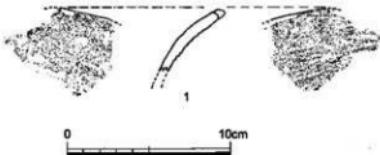


Fig.23 SX010出土繩文土器実測図 (1/3)

SP011(SB06?)も實際はSB01の建替時の柱穴の可能性も考えられる。柱穴覆土は暗褐色土が多いが、褐色気味の覆土もあり、古代中世までが考えられる。

SB04 (Fig.19) I区検出の1×1間の掘立柱建物。ただし調査区外北側に延びる可能性がある。南北1.95~2.07m×東西1.73~1.82m、方位はN-7°-W。柱穴覆土は、暗褐色土が多いが褐色土の多い柱穴もあり、古代から中世までだが、SK005に切られ、SP002が、V期(7世紀3/4期)の壺G破片(Fig.22-2)を出土したSP003を切ることから、7世紀末~8世紀後半までに絞り込める。

SB05 (Fig.20下) I区検出。建物の推定南東隅(SP010)から東辺列と南辺列を検出しているが、いずれも調査区外の北側および西側にさらに延びるだろう。南北2間(2.7m)以上×東西2間(2.9m)以上、方位はN-84.-E。東辺北側のSP301はSX004を切っている。柱穴覆土はまちまちで、SP010は黒褐色土主体、SP007-SP015は暗褐色土主体、SP301は褐色土主体、SP009は褐色土+ロームブロックに炭化物が混入する。SP009と隅柱のSP010が近い柱間であり、推定梁間の東辺の柱間がやや狭い柱間であるのは中世に多い柱配置の掘立柱建物であり、中世に下る可能性が考えられる。

SB06 (Fig.20上) I区で検出。SP075が深く、これに組み合う柱穴として比較的深いSP011が対応する可能性を考えた。他に対応する柱は無く、2本柱の門柱構造であろうか。ただしSP075は黒褐色土主体、SP011は暗褐色土主体で、後者はSB01の一部の可能性があり、この建物復元案は疑わしい。

### (3) 出土遺物 (Fig.21~23)

遺物の種類などは挿図中に記した。以下、特記すべきものを簡潔に記す(いくつかの遺物については各遺構の記述においてすでに説明したものもある)。(Fig.21)11は青白磁の皿。内底に魚文。15は高麗無軸陶器片。16は内外をナデ消し、初期須恵器か。19は透孔がある器台脚部片。18は8世紀の須恵器壺蓋。4は縄文晩期の浅鉢か。(Fig.22)1は縄文晩期の浅鉢か。突帯文だが刻目は無い。5は須恵器壺頸部か。2は須恵器壺G(壺身)であろう。8は古墳中期の土師器高壺。9は古代~中世の須恵器に似るが、外面に僅かな自然釉、内面は鉄サビ状釉薬のようないぶい赤褐色~灰赤色の物質が付着。中世陶器か? 11の石斧は縄文晩期、12~17の黒羅石剥片石器類は、剥離技術や調整などから縄文晩期~弥生前期に帰属するものか。(Fig.23)1は後期末(天城式)~晩期(黒川式)の粗製土器の口縁部で波状口縁か。外面は貝殻条痕文の調整。

<凡例補足> 繪図 (Fig.21-22) 中での略号を補足する。「中」=中期、「晚」=晩期、「木」=薪木期、「高」=高麗陶器(無軸陶器)、「青白」=青白磁、「陶」=陶器、「波」=波状文、「UF」=使用痕のある剥片、である。

### 5.まとめ

段丘中央部西側支丘における、主に古墳時代から中世までの集落の展開が確認できた。削平が著しい多くの遺構が遺存し、さらに北側の段丘斜面にも遺構が広がっていると考えられることになった。古墳後期には、屋内カマドを有する主柱の無い竪穴住居SC022や(竪穴屋)、貯蔵施設(?)の可能性のある逆梯子形土坑(竪穴)SX122の検出など、やや特異な遺構がみられた。特にSX122の類例の探索や性格の追究が課題である。SE023は、九州では珍しい「降下取水式」井戸の可能性があり、その時期や類例、系譜の課題が残る。また縄文後晩期の遺物は、5次・116次・170次で検出されている環状に分布する土坑(貯蔵穴? または掘立柱建物?)群と関連する集落域の広がりを示すものであろう。



Ph.3 I 区全景（南から；中央から手前はSC101・102）



Ph.4 I 区全景（北東部分除く）（東から）



Ph.5 I 区北半調査状況（西から）



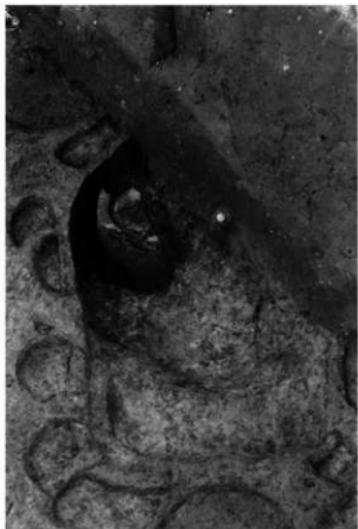
Ph.6 I 区西壁北半土層状況（東から）



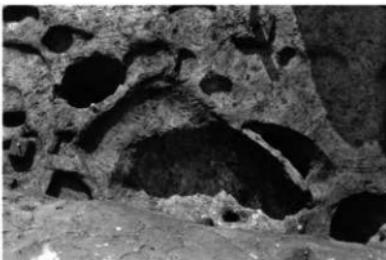
Ph.7 I 区南西隅調査状況（北西から）



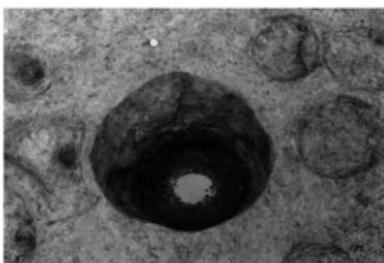
Ph.8 I 区北半調査状況（南東から）



Ph.9 I 区SK005遺物出土状況（南東から）



Ph.10 I 区SK005完掘状況（北から）



Ph.11 I 区SE012完掘状況（南から）



Ph.12 II 区全景（南西側除く）（西から）



Ph.13 II区東半調査状況 (SX021・SC022) (南から)



Ph.14 II区西半調査状況 (南から)



Ph.15 II区SE023土層・掘削状況 (南から)



Ph.16 II区SX027検出状況 (南東から)



Ph.17 II区SC022掘り方完成状況 (北東から)



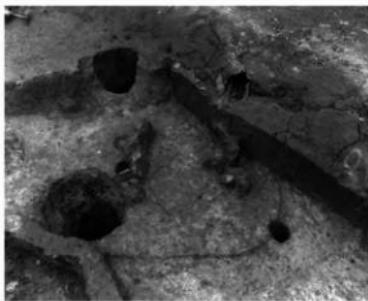
Ph.18 II区SC022掘削状況（貼床面・カマド遺存状況）（南西から）



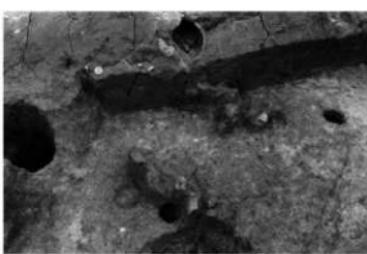
Ph.19 SC022カマド縦断土層状況（北西から）



Ph.20 SC022カマド上部遺存状況（南西から）



Ph.21 SC022カマド下部遺存状況（南西から）



Ph.22 SC022カマド下部遺存状況  
・右袖部土層状況（西から）



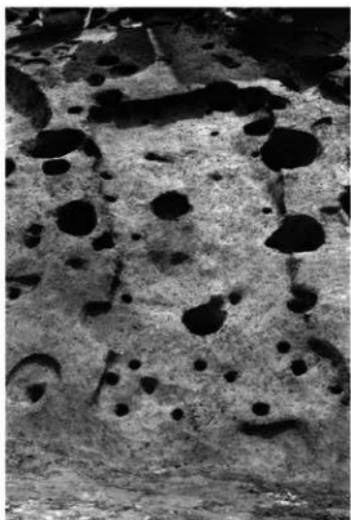
Ph.23 II区SX021南北土層状況（東から）



Ph.26 II区SX122南北土層状況（西から）



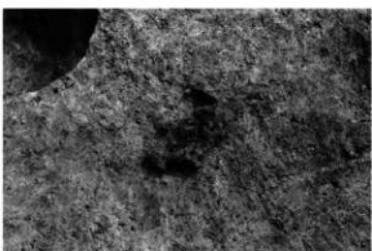
Ph.24 SX021東西土層状況（南から）



Ph.27 SX122充堀状況（北西から）



Ph.25 SX021充堀状況（東から）



Ph.28 SX122底面木質(有機物)痕跡(北から)